



時 栃 報 幼

題字／栃木県知事 福田富一氏

第128号

平成29年3月20日

一般社団法人 栃木県幼稚園連合会
〒320-0032 宇都宮市昭和1-3-10 栃木県庁舎西別館
☎028(622)2821 FAX 028(622)2816
●編集人／伊沢 信恭 ●発行人／石嶋 勇
■栃幼連ホームページ <http://www.youchien.or.jp>



平成二十八年度を振り返って



栃幼連理事長 石嶋 勇

皆様の温かいご支援とご指導を賜り平成二十八年度が無事終わろうとしております。皆様方のご協力に衷心より感謝申し上げます。

さて、子ども・子育て支援新制度が始まり二年：私たち保育現場にとって公定価格をはじめ、まだまだ先の見えない制度であり不安な気持ちには払拭できていません。

しかし、国は公定価格の基本単価プラス・配置加算・改善加算等で園の経営基盤の安定を図るために必要な予算を確保し確実に前進させました。

全日私幼連では私学助成を受ける園・新制度へ移行した園等、分け隔てなく振興活動を行っております。すべての園児の「保育料の無償化」を実現するために「幼児教育振興法」制定が必要であります。それに向けた要望活動を現在も強力に推し進めております。

一方、栃木県への「予算要望」については、平成二十九年度予算や政策に関する要望を十二月八日に知事室を訪ね直接要望書を福田富一知事へ手渡すことが出来ました。

今後更なる「幼児教育の質の向上」や教職員の「処遇改善」「保

育環境の充実」を実現するために、も運営費県単補助の増額や退職金振興財団への補助率の引き上げは必要不可欠であります。栃幼連は、栃木県幼稚園連盟と振興財団と一体となり振興活動してまいりますので引き続きご支援ご協力をお願い申し上げます。

平成二十八年度を振り返って

こども政策課長 阿久澤 真理



春光うつらかな季節となり、今年度も残すところあとわずかになりました。今年度は、二年目となる子ども・子育て支援新制度を軌道に乗せ、本県における幼児教育や保育、地域の子育て支援に係る量の拡充と質の向上を着実に進めていくための土台となる一年だったと認識しています。

さて、我が国は、急速な少子高

齢化の進行と人口減少という、かつて経験したことのない課題に直面しており、特に少子化対策は、国や地方自治体において、喫緊かつ最優先に取り組みなくてはならない課題となっております。

こうした中、幼児教育や子育て支援の充実に関する県民の期待は益々高まっており、幼稚園・認定こども園は、幼児教育の場としてはもとより、施設開放や保護者の交流、子育てに関する情報の提供等、子育て支援の中核的施設として大きな役割を担っていただいております。

県としても、少子化対策に取り組むべく、今年度「とちぎ元気発信プラン」をスタートさせ、第三子以降の保育料無償化の対象を三歳未満児から幼稚園児も含めた未就学児まで引き上げるとともに、一月には結婚を希望する若い世代の方々に幅広い出会いの機会を提供する「とちぎ結婚支援センター」を開設するなど、様々な取組を実施しているところです。

今後とも市町等と連携して、さらなる子育て支援の充実や新制度が円滑に運用されるよう的確に対応して参りますので、貴連合会におかれましては、子どもたちが心豊かに育ち、明るく生き生きと育つことが出来ますよう、一層の御尽力をよろしくお願いいたします。

設置者・園長研修会

開催日：平成29年1月20日(金)
会場：ホテルニューイタヤ

研修1

講師 栃木県保健福祉部 こども政策課
係長 野中 延寿 氏

①重大事故の防止について



睡眠中・食事中・プール等の重大事故防止については、認定こども園、幼稚園(新制度移行)と私立幼稚園(私学助成)ごとに、報告、検証、ガイドラインの策定または指針の策定の必要があること。

また、学校保健計画、学校安全計画、危険発生時対処要領の策定をしなければならないことの説明があった。

②保育教諭の配置基準の特例について

幼保連携型認定こども園では、朝夕の園児が少数である時間帯の場合、一人は、知事が保育教諭と同等の知識等を有すると認める者にすることができること。また、保育教諭を小学校教諭又は養護教諭の普通免許状を有する者に代えることができることについての説明があった。

講師 栃木県保健福祉部 こども政策課
主査 稲見 啓 氏

③施設型給付について



平成二十九年度における私立幼稚園の子ども・子育て支援新制度への移行状況、公定価格の対応、予算案状況、保育士等の処遇改善、幼児教育の段階的無償化の推進、認定こども園等への財政支援、公定価格の試算ソフト等の詳細な説明があった。

どれも新制度が円滑に運用する上で欠かせないもので大変有意義な研修となった。



講師 栃木県幼児教育センター
センター長 森田 浩子 氏

研修2 「園内研修のための参考資料『自分達でできる研修ガイド』について

専門性の高い教員集団を目指して、園内研修の必要性や内容・期待できる効果についてなど、具体的な活用例の紹介を交えての講演だった。



多様な変革が求められているからこそ一人では対応が難しく、職員間で知恵を出し合い、ベターな指導・支援が必要とされる。教師間の相互理解を深めることで、組織が活性化し、専門性が向上する。その為に有効なのが園内での研修であり、目指す子ども像を共有化することで園全体に一体感が生まれ、保護者や地域から信頼されることに繋がっていくということである。

研修の一つの方法として、付箋を使ったワークショップは全員が発言しやすく話し合いが活性化し、意見を可視化でき、自分自身の振り返りにもなるなど、具体的な方法とその利点を話され、幼児教育センターから出されている「研修ガイド」の活用を勧めていた。

最後にセンター長は、今後、それぞれの園で園内研修を実施継続し、園全体の向上に努めてほしいと締めくくった。



講師 益子昌平塾 塾長 セコム株式会社相談役 木村 昌平 氏

研修3 「幼稚園教育の意義についての私見～人としての精神基盤をつくる～」 副題「お天道様見てるよ」



◎はじめに

・江戸期の三～四歳の教育の話
幼年期から様々な形で教育が行われていたことについての確認。
※益子昌平塾の立場から考えられることを主題にしていきたい。

◎本題として

- 一、幼児教育の意義・必要性
- 二、人はいかにして生きるべきか
日本特有の精神論は知らず知らず形成されるもの(魂・感情・精神)
・人格形成こそ教育の本義なり!
・四書五経から学ぶ(二宮金次郎)
・徳=自己の最善を他者に尽くす
・江戸期の一貫した規範形成教育に学ぶ物が多い。
- 三、いま日本人に求められるもの
※日本人としてのアイデンティティ
「お天道様見てるよ」の精神
※アノミー社会の根本的解決

「親が子を叱るにも基準が必要」

◎まとめ

今年の干支は「丁酉(ひのととり)」
=今後三十年の礎の年
=大きな転換のスタートの年
※干支と十二支組合せ六十年周期

これまでも様々な変化の始まりだったことを考えるとやはり節目の年!油断すると大変だが、慎重かつ大胆にそれぞれががんばっていくべきと思う。



幼児教育を、全く違った目線からひも解いた講演内容だが、何かと思い当たる点があったり、これまでの経験を振り返る機会となり、充実した時間となった。「丁酉」の年の始めに、貴重な経験をさせてもらい、いい転換の年にしていきたい。

※「お天道様見てるよ」という言葉は、以前からいわれ続けているものでもあり、その精神論は引き継いでいくべきものと感じた。

研修会だより

平成二十八年年度
資質向上選抜養成講座Ⅻ 報告

第一回 七月九日(土)

講師 子どもとことば研究会(元立教女学院短期大学教授)

代表 今井和子

テーマ 「乳幼児の心の育ち」

と指導計画

第二回 八月三日(水)



講師 国際医療福祉大学クリニック言語聴覚センター小児精神衛生相談室 臨床心理士

小林 順子氏

テーマ 「乳幼児の心の育ち」

「ロバートソンフィルムから考える」・「ジエーン」

「一歳七か月女児の場合」

午後の部

講師 宇都宮共和国大学 准教授

土沢 薫氏

テーマ 「発達に凸凹がある子どもの困り感を理解し、援助に役立てる」・心理的疑似体験を通して」

参加人数 三十五名



第三回 十月十九日(水)

公開保育研修 聖末広幼稚園

「公開保育」異年齢保育」

コーディネーター

釜井台幼稚園 山崎 英明先生
今市中央幼稚園 大嶋 裕先生

認定こども園すみれ幼稚園
岡本 純世先生

参加人数 三十三名

第四回 十一月三十日(水)

講師 国際医療福祉大学クリニック言語聴覚センター小児精神衛生相談室 臨床心理士

小林 順子氏

テーマ 「乳幼児の心の育ち」

「ロバートソンフィルムから考える」・「ジエーン」

「一歳七か月男児の場合」

参加人数 三十八名



今年でこの講座も十二年となり一回り(千支)をできたことは、歴代の教研委員長、担当の先生方のご努力の賜物と感謝の念に堪えません。十二年前、栃木県の幼児教育の質の向上を願い、声を上げ、実践し続けたことにも敬服いたします。今後そのレガシーを継いでいく責任と使命感をもって、来年度も研修計画を立案していく所存です。たとえ、講座の看板が変わるうとも想いは一つ、すべての子ども達のため、一人ひとりの教員のために尽力していきたいと思

います。



青年部県外視察研修会

期日 平成二十八年十月三十一日(月)～十一月一日(火)

視察先 京都府京都市

参加 二十一

今年の青年部県外視察研修会では京都市を訪れ、二日間にかけて三つの幼稚園を視察した。

一日目は嵯峨嵐山にある嵯峨幼稚園を視察。緑溢れる園環境や温かさを感じる園舎の中で、子どもたち一人ひとりの自主性や主体性を重んじる教育を見ることが出来た。その後、園長の藤本先生より、保育に対する思いや人材育成の重要性などをお話いただいた。

一日目の夜には、京都市の私立幼稚園連盟との懇親会を行い、情報交換など交流を深めることが出来た。

二日目の午前中は、東

山にある泉山幼稚園を視察。自然豊かな環境にあり、季節を感じられる園庭や、自然物をふんだんに使った室内環境は大変興味深いものであった。園児一人ひとりが礼儀正しく、また園長先生や副園長先生のお人柄にも触れ、心温まる視察となった。

午後訪れたのは、紅葉の美しいことでも有名な永観堂禅林寺の境内に位置する永観堂幼稚園。何百年と守られてきた自然を残した園庭はとても趣があり、園児が思い思いに遊んでいる姿が印象的であった。



もに立地や自然環境に恵まれた幼稚園であり、なかなか真似をすることは難しいが、幼稚園としての本質の部分を改めて考えさせられたような気がする。

新制度へ移行し、認定こども園化が進んでいる今だからこそ、幼稚園教育の重要性についてしっかりと考えていきたいと思う。

公益財団法人 全日本私立幼稚園
幼児教育研究機構 園長・リーダー研修

期日 平成二十八年十一月二十五日(金)～十一月二十七日(日)

会場 東京大学福武ホール
武蔵野大学有明キャンパス

講師

田中雅道氏(全日本私立幼稚園
幼児教育機構理事長)

秋田喜代美氏(東京大学大学院
教授)

小田豊氏(聖徳大学教授)

杉山郁子氏・林芳孝氏(一般社
団法人日本体験学習研究所)

岡健氏(大妻女子大学教授)

安岡知子氏(社会保険労務士法
人人材研究所)

水谷秀史(全日本私立幼稚園連合
会経営委員会副委員長)

藤原誠氏(文部科学省初等中等
教育局長)

課題(1) 教育保育を創る

田中氏、秋田教授より、幼児教育の歴史に触れながら、現在の課題、今後の展望についてのご講話をいただいた。今、幼児教育に求められていること、園のリーダーとして取り



組むべき課題を再確認することができた。

岡教授の講義では、保育場面の写真を用いて保育を語るグループワークを行った。何気ない場面でも、写真に残してじっくり考察することにより、子どもの心情や育ちなど、多くの気づきがあった。子ども一人ひとりに着目した保育を展開するために、今後も活用したい方法であった。

課題② マネジメントを構築する

安岡氏の講義では、安定的に質の高い教育・保育を提供するための組織作りについて学んだ。教育理念の共有や就業規則の活用など、基本的なことについて再確認できた。

また、水谷氏のワークショップを通して、付箋の活用や、話し合いのマネジメント方法について学んだ。園内での会議や話し合いに活用できる内容であった。

課題③ 同僚性を深め保護者・地域・社会・行政と連携する

杉山氏、林氏の講義のワークショップでは、リーダーシップの機能や役割について学ぶと共に、自身について振り返る良い機会となった。人と関わるときの自分の特徴に気付くことや、場をとらえる二つの視点など、組織のリーダーとして他者と関わる際の重要な視点を得た。

文部科学省藤原氏より、学習指導



要領改訂の方向性や、それらの審議における幼児教育部分のポイント等についてご講話をいただいた。幼稚園等と小学校の教員間で、修了時の姿が共有化されることにより、幼児教育と小学校との接続の一層の強化が図られることが期待されている。

第三回 保育セオリー講座

期日 平成二十八年十二月二十一日(水)

会場 コンセーレ

参加 百三十五名

講師

聖徳大学前教授・幼児教育研究者・学校心理士

高橋かほる氏

内容

「保育を保護者にどう伝えるか」カウンスリングマインドとともに」

今回のセオリー講座では「カウンスリングマインドについて」「保護者への対応」「子どもの理解」という内容で行われ、相手の心に寄り添うことの大切さを学んだ。

保護者に対して、カウンスリングマインド、受容(そうすね等)・繰り返し(保護者の言葉を繰り返す)・明確化(話のポイント)・支持・質問を使うことによって信頼関係を築き、相手の納得を引き出しやすくなる。また、子どもの言動の読み取りについて視点をあて、幼児の内面理解や、何が成長かを見極めるポイント



ト、対応を考えることが大切である。これらの観点から、親の心配に対して「成長したことを挙げる」「子どもの言葉や行動の意味を理解」することによって保護者と保育者の関係性が向上する。心のつながりを大切に、心の動きに対応しながら相手の立場に立つてありのままの姿を温かく受け止める。カウンスリングマインドを日常的に取り入れる重要性を確認し、今後に活用できる研修であった。

青年部合宿研修

期日 平成二十九年二月八日(水)

会場 ホテルニユーイタヤ

参加 十九名

内容 「指導者としてのリーダーシップ」

講師

人材育成家・慈善活動家 加藤 秀視氏

加藤氏は少年院を出入りする非行少年少女や、問題を抱える親子など一〇〇〇名以上の問題を解決に導くなど、独自の教育理論や手法は各界から定評がある。そのような実績を積まれた人材育成家であり、慈善活動家でもある。

氏は「何のために教育をするのか?仕事は好きか?ワクワクするののか?」と冒頭から問い掛ける。「指導者として最も重要な事は、まず自分が楽しむこと。特に教育現場において教師(大人)がワクワクしなければ、子供もワクワクしない。」



クワクしない。とにかく人を育てるには、エネルギーや意識の高さが必要だ。強い信念と思いビジョンに人の心は動かされる。」と続ける。当然のことながら、人を育てるには強い信念とエネルギーを要する。

成熟社会を迎え、また少子化やグローバル化、ICTの発達など昨今の日本経済を取り巻く環境は急速に変化し働き方や組織づくりの見直しが問われている。そのような中、強い組織を構築するため、人材育成という課題に迫られている。強い組織には、組織内の個々に高い意識と強い結びつきがあるように思われる。そしてその個々の能力を組織として発揮できるようマネジメントする強いリーダーが存在するのではないだろうか。

我々の業界においても保育士・幼稚園教諭不足など問題が山積している。そういった中、特に人材育成は早急に取り組まなければならない課題なのではないだろうか。

公益財団法人 全日本私立幼稚園
幼児教育研究機構
平成二十八年年度・全国研究研修
担当者会議

期日 平成二十九年
一月十九日・二十日

会場 京都府京都市
京都ガーデンパレス

十九日

報告

研究研修委員会の取り組みについて

〔公財〕全日私幼研究機構
研究研修委員会 委員長

宮下 友美恵氏

講演一

講師

新幼稚園教育要領について
文部科学省初等中等教育局
視学官 湯川 秀樹氏

二十日

講演二

幼児教育の根幹になる学力
観について

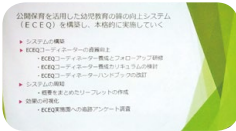
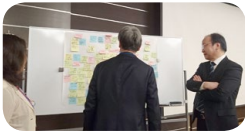
講師

〔公財〕全日私幼研究機構
理事長 田中 雅道氏

小倉教研委員長（十九日の
み）、山崎副委員長の二名で参
加。

【田中理事長より報告】

①処遇改善費を私学助成にも予算請
求・別建てで新設予定。幼児教育現
場全体の処遇改善を求めていく。②
免許更新。平成三十年以降に新旧の
制度が重なり、現在よりも三〇四割
受講者が増える。各地区研修を免許
更新講習にするなどの対応が求めら
れる。③五年以上勤務する先生の資
質向上のためのミドル
リーダー研修の充実を
計る（離職防止、キャ
リア育成、待遇の改善）
④幼児教育センターと
各市町村での幼児教育
アドバイザー設置に対
し行政に働きかけ一
緒に構築する。⑤公開保
育コーディネーター養
成講座と園長・リーダー
研修を幼児教育アドバ
イザーになるための内
容としていく。⑥幼児
教育振興法成立への現



状⑦〇・一・二歳、家庭教育支援が重
要。その体制整備を求められる。⑧
幼児教育の質の向上のため評価（第
三者評価）は必要。その前提として
園内でのPDCAサイクルの機能・
確立が課題。⑨非認知能力を育てる
重要性。

【宮下委員長より報告】

①質の高い幼児教育のためこれまで
以上に研究・研修が重要になる。②
現在実施している公開保育を通した
質の向上を更に進化形として「公
開保育を活用した幼児教育の質の
向上システム」（Early Childhood
Education Quality System 略し
てECEEQ＝イーセック）の構築・
周知・効果の可視化を進めていく。
③公開保育コーディネーターは今
後、ECEEQコーディネーターと呼
称する。④第三者評価者養成研修を
新に計画・実施する。⑦ミドルリー
ダー研修が重要。リフレクティブマ
ネージャー育成が課題。

【湯川視学官の講演】

①今回の要領改訂にと
もない自園の保育・立
ち位置を総点検しても
らいたい。②今回の改
訂は幼児教育と小学校
以降の学校教育との接
続をより意識した改訂
である。



設置者・園長経営研修会

期日

平成二十九年二月十六日（木）
十四時～十六時

会場

二荒山会館（鶴の間）

内容

「幼稚園・認定こども園の
運営にかかる危機管理に
ついて」

講師

株式会社アイギス代表取締役
脇 貴志氏

〔はじめに〕

「予防」とは予め防
ぐこと。しかし予め
防ぐことが出来ない
事故も多くある。そ
のため、事故が起きてしまった時に
適切な対応（危機対応）が出来るか
どうか問われる。



第一部「事故が起こった。そ
の時にどうするか」

①早く動く、そのためにも、「受け
止める」＝認める

事故が発生した場合、ほとんどの
人は認めることが出来ず、初期対応
が遅くなる。事故後の会議などは時
間の無駄になる場合が多く事態が悪
化するばかり。まず、先方に謝罪、
報告に行くなどのスピード対応が肝
心。

また、〇・一・二歳児を預かる保育
園などは予測不可能なケースもあり
得るが、三・四・五歳児を預かる幼稚
園については、必ず人的問題（人的
ミス）が潜み事故が発生している事
を認める。

②最悪を避ける。その為にも「取り
繕わない」＝言い訳などをしない

言い訳などをすると世間のイメージ
が更に悪化し、二次災害を化す。
その為にも管理が悪かったことを直
ぐに認め言い訳などをしない。「謝っ
たらいけない」「認めたら負け」と

いう概念は捨てること。世間は認め
ないから攻撃するのであり、言い訳
などをすると益々事態は悪化する。

③自分が良い様に勘違いしない。そ
のためにも客観性を持って対応。

被害者や加害者のプライバシーにつ
いては話すことを控えるが、その他に
ついては事実として認め対応する。

対応の優先順位 1、被害者に対
して対応（謝罪・報告） 2、利用者
に対して対応 3、職員に対して対
応（職員は理解してくれているだろ
うという考えは甘えに過ぎない）

第二部「園での安全・危機管理」

①リスクとリターンは表裏一体であ
ることを知る。

自分勝手に「子ども達のため」と
言ってリターンをとる。しかし、そ
の一方でリスクがある事も知る。事
故には複数の原因がある。たまたま
その日は原因が重ならなかったから
事故が無かっただけであり、重なれ
ば事故は発生する。

②「絶対安全を目指さなければなら
ない。

しかし、絶対安全などあり得ない。
しかし目指さなければリスクが見え
てこない。

③危機管理とはリスクを取ることに
最悪の事を想像する。プール指導

については最悪園児
が死ぬということ知
る。例えば深さ二十セ
ンチ程度であったと
してもそれを侮らな
い。こどもの命より
優先される教育など
ない。





平成29年度私立幼稚園関係予算案

(単位：千円)

事業名	平成29年度 予算額(案)	平成28年度 予算額	概要
1 幼稚園運営費補助金	2,846,356	3,163,326	学校法人が設置する幼稚園の運営費に対する助成 園児一人当たり 187,300円(H28 185,400円) 一種免許状加算分 2,392千円(新制度移行園分)
2 幼稚園教材費等補助金	1,486	2,151	個人及び宗教法人が設置する幼稚園の教材費等経費に対する助成 園児一人当たり 39,100円(H28同額)
3 施設型給付費(1号認定子ども分)	1,988,309	1,583,088	施設型給付に係る市町への負担金及び補助金 ・負担割合 全国統一費用部分1/4、地方単独費用部分1/2
4 地域子育て推進事業費補助金	156,570	169,440	
(1) 子育てランド事業	31,890	31,940	私立幼稚園及び認定こども園が実施する子育て支援事業に対する助成 A 2事業実施かつ市町補助130千円以上 1園当たり 130千円 B 3事業以上実施かつ市町補助200千円以上 1園当たり 200千円
(2) わんぱく保育推進事業	124,680	137,500	私立幼稚園及び認定こども園が行う預かり保育事業に対する助成 ○通常分 1園当たり 800千円、1,200千円、1,600千円 ○特定分(4時間超) 1園当たり 160千円、280千円、400千円 ○長期休業分 1園当たり 160千円、280千円、400千円 ○休業日分 1園当たり 300千円、480千円、660千円
5 一時預かり事業(全類型分) (子ども・子育て支援交付金)	195,464	214,044	一時預かり事業を実施する市町に対する助成 ・県補助率 1/3
6 栃木県私立幼稚園振興財団補助金	183,202	171,840	私立幼稚園及び幼保連携型認定こども園の教職員の退職金給付事業に要する経費に対する助成 ・補助率 → 教職員標準給与額の27/1000(H28同率)
7 特別支援教育費補助金	474,712	551,544	特別支援を要する園児が就園する私立幼稚園及び認定こども園に対し、その経費の一部を助成 対象園児一人当たり 学法二人以上 784千円(国庫対象) (H28同額) 上記以外 392千円(県単)
8 私立学校教職員共済補助金(幼稚園分)	72,141	64,829	長期掛金について、標準給与額の8/1000を補助(H27同率) ・対象者 3,389人(H28 3,057人)
9 栃木県私学団体補助金	6,000	6,000	
(1) 栃木県幼稚園連合会補助金	3,000	3,000	栃幼連が行う研修事業に要する経費に対する助成 ・補助率 定額(1/2以内)
(2) 幼稚園特別研修費補助金	3,000	3,000	栃幼連が行う子ども・子育て支援新制度を踏まえた研修事業に要する経費に対する助成 ・補助率 定額(1/2以内)
10 私立幼稚園被災幼児保育料等減免事業費	575	1,142	東日本大震災の被災幼児に係る保育料等減免事業に対する助成 ・補助率 10/10(国の交付金活用事業)
11 認定こども園整備事業	678,280	1,356,937	認定こども園の幼稚園部分の施設整備事業を実施する市町に対する補助 ・県補助率 1/2(国の交付金活用事業)
12 幼稚園耐震化事業費	406,644	628,863	認定こども園への移行を予定している私立幼稚園の耐震化事業に対する補助 ・補助率 1/2(国の交付金活用事業)
13 幼稚園緊急環境整備事業費	105,460	66,014	○学校法人立幼稚園及び認定こども園が行う遊具等環境整備に対する助成 ・補助率 認定こども園 1/2 左記以外幼稚園 1/3 (国の交付金活用事業) ○認定こども園等における研修支援 ・補助率 1/2(国の交付金活用事業)
14 第3子以降保育料免除事業費 (幼稚園児・1号認定子ども分)	157,066	144,429	第3子以降の未就学児の保育料免除事業を実施する市町に対する助成 ・県補助率 1/2
15 新制度移行臨時助成費	3,500	32,000	教育環境の整備充実のための新制度へ移行した学校法人立の幼稚園及び認定こども園に対する平成29年度に限る臨時的助成 園児(1号認定子ども)一人当たり 2,400円
	7,275,765	8,155,647	

平成29年度予算案の内容について

1の私学助成幼稚園に対する運営費補助金については、国庫補助と地方交付税の増分として園児1人当たり1,900円増となったが、県単補助4,800円については残念ながら現状維持にとどまった。県単部分の補助単価は、隣の群馬・茨城に大きく引き離されており、今回もその差は縮まらなかった。

2～14の事業については、新制度への移行園が増加することによる総額の増減はあるが、内容は現状維持となった。県の少子化対策を主旨として提案した「子どもさん応援 多子世帯保育料免除事業(3人いれば保育料免除)」が29年度予算案に盛り込まれなかったのは残念である。15の新制度移行臨時助成費については28年度に限るとされていたが、29年度に移行した園だけを対象に事業としては継続されることとなった。27、28年度に移行した園が対象とならなかったのは残念だが、継続事業となったことに感謝したい。

振興委員長 馬場 章信



今年度も各研修や調査研究等、幼児教育センター事業への御協力ありがとうございました。

新規採用幼稚園教諭研修を 振り返って

昨年の十二月二十六日に、全日程が終了しました。集合研修、宿泊研修、地区研修、どの研修も新採者は熱心に取り組んでいました。閉講式での新採者の表情は、開講式の時とは違い、一年間の成長を十分に感じさせるものでした。



新採者からは、「改めてこの職業の良さを知り、また誇りに思うようになりました」「同期の仲間とたくさん悩みや情報を交換し合い、自分を見つめ直す場でした」「今まで以上に子どもと向き合い、内面を理解し、共に成長していきたいです」などの感想が寄せられ、この一年で得たものを糧に、今後の保育に希望を抱いていました。



ぜひ、研修の成果を保育に生かしてください。今後の御活躍を心より応援しています。

幼稚園教職五年目研修を 振り返って

昨年十一月二十八日に、五年目研修(三日)の全日程が終了しました。

「個と集団を育てる」を年間のテーマに掲げ、学級経営や同僚性、保護者対応などについて研修をしました。受講者は、原点に立ち返りながら、改めて五年目の役割を自覚しているようでした。

今年度は七十四名が参加しました。



いつの間にか「当たり前」になっていることを、もう一度教育要領を基に見直したい。

中堅として、今までの経験と知識を活用しながら、幼児教育のプロとして対応していきたい。



受講者は、今後の栃木県の幼児教育を支えていく中核となる存在です。御活躍を期待しております。

幼稚園教職十年経験者研修を 振り返って

振り返って

幼稚園教職十年経験者研修の全日程(園外研修六日・園内研修十日)が終了しました。今後の栃木県の幼児教育を担っていく三十七名が受講しました。

今年度は、カリキュラム・マネジメントを軸にして、それぞれの園の教育課程を持ち寄り、「組織マネジメント」「幼小連携」「協同する経験」「特別支援教育」等、幼児教育の今日的な課題を視点に、情報交換をしながら、園の教育活動を見直ししました。

受講者の感想を御紹介します。



自分の資質を向上させながら、同僚を巻き込んで園全体の資質の向上につなげていきたい。

協議をしながら、不安や悩みを解決することができた。園内研修でも、たくさん協議を取り入れていきたい。

研修で学んだことを、園内で積極的に取り入れ、園経営、運営に参画できるようになりたい。



お疲れ様でした。園のミドルリーダーとして御活躍ください。

★お願い★

次年度の「幼稚園教職5年目研修」と「中堅幼稚園教諭等資質向上研修」の対象者及び受講者についての照会(文書)を、3月14日に発送いたします。



お手数ですが、文書が届きましたら、御報告をお願いいたします。

重要なお知らせ

教育公務員特例法の改正により、これまでの「幼稚園教職10年経験者研修」が「中堅幼稚園教諭等資質向上研修」に名称変更となります。

期日 平成二十九年一月二十八日(土)
今年度は、「カリキュラム接続の試み」とちぎの子どもの学びをつなぐために」をテーマとして行いました。

幼児教育と小学校教育のカリキュラムの接続をより一層強化することが求められている中、いかにしてそれを構築していくのか、こども園、小学校、町の連携組織それぞれから三つの実践発表がありました。



認定こども園あかみ幼稚園
長島弥生 副園長

栃木県教育研究発表大会 「幼小連携部会」



こども政策課だより

各種提出書類について

●運営費補助金（全体分）

補助金実績報告書の提出期限は、平成二十九年五月上旬（予定）です。公認会計士等の監査日程の都合等により、提出期限までに平成二十八年度決算が確定しない場合であっても、仮決算の段階で県に実績報告書を提出し、決算確定後、再度提出されるようお願いします。

●教材費等補助金（全体分）

補助金実績報告書の提出期限は、平成二十九年四月中旬（予定）です。

●運営費補助金及び教材費等補助金特別補助（わんぱく保育推進事業・子育てランド事業）

事業実施報告書の提出期限は、わんぱく保育推進事業及び子育てランド事業ともに平成二十九年四月上旬（予定）です。

●平成二十八年度決算書及び平成二十九年年度予算書の提出について

平成二十八年度決算書及び平成二十九年年度予算書の提出期限は、平成二十九年六月三十日（金）です。決算書等（新様式）の電子データをメールアドレスがある幼稚園・認定こども園宛てに別途メールでお送りします。なお、決算書・予算書については、学校法人会計の一部改正に伴い、新様式となっておりますので、内容をよく御確認の上、作成してください。

●資産総額の変更登記届

平成二十八年度決算に伴う資産総額の変更登記は、寄附行為で定める期限（5月末日又6月末日）までに行い、期限後一ヶ月以内に登記届届を提出してください。

※各種提出書類の詳細については、別途送付する通知文を参照の上、期限内の提出をお願いします。

平成二十九年

四月～六月までの事業予定

4月5日	新規採用幼稚園教諭研修集合研修
5月17日	※5年目研修
5月17日	栃幼連定時総会 28年度決算総会
5月22日	保育アークナール
5月23日	※中堅幼稚園教諭等資質向上研修
5月25日	新採研公開保育宇大附属幼稚園
6月1日	※幼小連携推進者養成研修
6月9日	新採研公開保育宇大附属幼稚園
6月9日	保育セオリ
6月20日	資質向上研修
6月21日	設置者・園長研修会
6月22日	※指導助言者説明会
6月22日	青年部全体委員会・研修会
6月24日	公開保育研究会・宇大附属幼稚園
6月29日	※幼児期の特別支援教育研修
6月29日	※は幼児教育センター事業

教育研究委員会よりお知らせ

平成二十九年年度は文部科学省として新要領の周知徹底の時期と位置付けています。栃幼連教研委員会事業の中で重点的に研修を設ける予定です。特に六月二十日に予定している湯川視学官の講演は、各園理事長・園長等の参加を強くお願いするとともに、園内研修等で伝達し、園全体として質の向上・改善に取り組んでください。また、幼児教育センター主催の新要領解説の内容を踏まえた研修も、県南・県央・県北の三箇所で行い、秋以降に予定させていただきますので、できるだけ多くの教職員の参加をお願いいたします。

総会予告

平成二十九年年度
栃幼連 定時総会
（二十八年度 決算総会）
平成二十九年五月十七日（水）
会場：コンセーレ

編集後記

子どもの可能性は無限大

少し前の話になるが、昨年の夏のリオオリンピック・パラリンピックにて、本県関係の選手たちが、十名参加し、萩野選手をはじめとして、複数のメダルを獲得した。大変喜ばしく、また、誇らしい気持ちになった。

オリンピックの多くは、「オリンピックに出場する」という夢を幼少期からもっていたそつだ。幼少期の頃は漠然とした夢だったかもしれない。だが、夢を持たないのではないだろうか。子ども達には「こんなことをやってみたい。」という夢を見つけて欲しいと思う。そして、具体的な目標をもってそれに向かって努力できたらいと思う。子どもたちの可能性は無限大だ。夢に向かって進む子どもたちを応援していきたい。

感動、元氣、勇気を与えてくれたオリンピックに、夢をもつこと、目標をもって進む大切さを教えられた気がする。今から、二〇二〇年の東京オリンピックが待ち遠しい。

（一ノ瀬 孝之）